

知的障害のある者が「福の神」となること

— 福助さん・仙臺四郎考 —

相澤 雅文

(京都教育大学)

A Man with Intellectual Disability Becoming a "God of Fortune"

— A Study of Fukusuke-san, Shiro Sendai —

Masafumi AIZAWA

抄録：福助さんと仙臺四郎は「福の神」とされている。福助人形や仙臺四郎の写真や人形を飾る家庭や店舗は現在でも多い。福助さんは水頭症であったとされ、仙臺四郎も「バアヤン」としか話せず知的な遅れがあったとされる。知的障害のある者がなぜ「福の神」となったのか。それには折口信夫が論説した「他界」や「まれびと」、「形代（かたしろ）」といった民俗学的な思想が関係しているのではないかと考えられた。知的障害のある人が「まれびと」として受け止められ、そうした「まれびと」が幸福をもたらすということは、合理的説明ができない神秘性を伴ったことと江戸時代や明治時代の人々は感じたに違いない。人々は、それにあやかるときの形代として福助人形や、仙臺四郎の写真を求めた。それが現在まで引き継がれて来たことは非常に興味深いことである。本稿は、知的障害のある者と福の神という概念を民俗学的視点からとらえようと試みたものである。

キーワード：知的障害、福助さん、仙臺四郎、福の神、まれびと、形代（依代）

Key Words：Intellectual disability, Fukusuke, Mr. Shiro Sendai, God of Fortune, Rare visitor, Katashiro (Yorisiro)

I. はじめに

1. 知的障害ということ

『ICD-11』（WHO, 2018）では「知的発達症」、『DSM-5-TR』（APA, 2023）では「知的発達症（知的能力障害）」と表記されている。一方、福祉の立場においては知的障害者福祉法など「知的障害」と使用されていることが多く、教育的立場においても知的障害特別支援学校など「知的障害」が使用されていることから、本稿では「知的障害」を使用した。

我が国において知的障害という用語は、複数の法律に記載されているが、具体的に何をもって知的障害とするかということに明確な法的規定はない。

文部科学省（2023）では「知的障害とは、一般に、同年齢の子供と比べて、『認知や言語などにかかわる知的機能』の発達に遅れが認められ、『他人との意思の交換、日常生活や社会生活、安全、仕事、余暇利用などについての適応能力』も不十分であり、特別な支援や配慮が必要な状態」としている。

また、厚生労働省（2005）では「知的機能の障害が発達期（おおむね18歳まで）にあらわれ、日常生活に支障が生じているため、何らかの特別の援助を必要とする状態にあるもの」としている。

知的機能の障害の例として、こみいった文章又は会話の理解が十分にできなかったり、金銭の授受のような日常生活の中での計算が苦手だったりすることや、衣服の着脱・食事・排泄といった日常生活動作の獲得に時間がかかったりすることがあげられる。知的障害の状態は個人差が大きいことや環境的側面からの影響を受けるため、理解や支援のあり方は一人ひとり異なるのである。

日本の障害児教育の歴史を振り返れば、福沢（1866）が明治の幕開けに欧州の「哑院」「盲院」「痴児院」を紹介しているが、建白書『盲哑学校ヲ創立セラレンコトヲ乞フノ書』（1871）において、「我国ノ盲哑ト雖モ教育」とりわけ「適宜ノ工芸ヲ授与」すれば「無用ヲ転ジテ有用トナシ」得るとされているように、我が国の障害児教育は視覚障害、聴覚障害が先行して行われてきた。日本教育令案（1878）で「盲学校」、「聾哑学校」、「改善学校」が提示されたが、自由教育令（1879）では、障害児教育関係は全て削除され、養護学校義務化（1979）まで100年を要することとなったのである。

2. 神と形代（依代）

日本には八百万（やおよろず）の神がいる、とされる。八百万とは数えきれないくらいということである。平藤（2021）は、日本の神の多様性として『古事記』や『日本書紀』に登場する多くの神、民間の信仰から生まれたお稲荷様や恵比寿様あるいはオシラサマのような神、仏教の神と融合した大黒天や弁財天のような神、勉学の神とされる菅原道真のように実在した人物を神格化した神、あるいは酒吞童子や河童などの異形の神を紹介している。アイヌ民族においては、ヒグマ（キムンカムイ）やシマフクロウ（コタンコロカムイ）、タヌキ（アパサムンカムイ）など動物も神として大切にしてきた。また、山神といえばニホンオオカミのことである。更には、長い年月を経て使われた道具（たとえば、雑巾やお椀など）などにも神や霊が宿り、付喪神（つくもがみ）となるとされている（水木、2022）。

私たちに幸福や利益、福德をもたらす神さまを「福の神」あるいは「福神（ふくじん）」という。その代表的なものは「七福神」であろう。恵比寿・大黒天・毘沙門天・弁財天・布袋・福祿寿・寿老人の七神があてられている。七福神が乗っている船を「宝船」と称し、新しい歳に良いことが起きることを願う大晦日に枕の下に敷いて寝るなどのことが行われてきた。また、筆者の故郷（宮城）では、年末に「お歳徳神様」と呼ばれる恵比寿・大黒天などの御神像が描かれた紙を幣束とともに新しいものに飾り直す風習があった。

このように古くから民間信仰として、形代（かたしろ:祭りのときなど神の代わりとして置かれるもの。人形などを祀っての信仰がされてきている。形代とは、神霊が依り憑く（よりつく）依代（よりしろ）の一種である。依代は民俗学の創生期に柳田国男と折口信夫によって論考されている。折口（1915）は「髭籠の話」（髭籠（ひげこ）とは、祭りのだんじりの竿の尖につける飾りのこと）の中で、「神の標山（しめやま）には必ず神の依るべき喬木（きょうぼく）があつて、しかもその喬木にはさらにあるよりしろ^{ママ}があるのが必須の条件であるらしい」としている。神の依るべき喬木は、その地に神を宿すための依代（ご神木であろう）となり得るものであり、髭籠はだんじりに神を宿すための依代なのである。

形代は古代から存在したとされ、縄文時代（約1万年以上前）の土偶、古墳時代（約1700年前）の埴輪などもその役割を果たしたと考えられている。河野・山本（2024）は、縄文時代の土偶にはお腹がふくらしたものが多いことから、妊娠出産に関連し無事の出産を願ったものという考え方が根強いのではないかとしている。また、河野・山本（2024）は、古墳時代の埴輪に関しては、家系埴輪の周りを盾型埴輪や甲冑埴輪などを配置することにより結界をつくり守ることで、死者が邪悪なものに取り付かれ「荒ぶる神」とならないようにしていたのではないかとしている。また、「雛流し」は子どもの無病息災を願い、紙や葉で作られた簡単な人形を川や海にその厄を流す行事である。人間の場合は人形を用いるなど、神霊が依り憑き易いように形を整えた物が依代となってきたといえるのである。

3. 「まれびと」と神

（1）「まれびと」とは

上野（2022）は、折口信夫のキーワードを『他界』とともに重要な用語が『まれびと』としている。上野は、折口の学問の基点に「他界へのあこがれ」があり、他界とは、「人が生きているうちに行くことができない永遠の場所」（Ex. 天国、極楽、常世の国など）としている。他界は海の彼方に存在するという思想があり、前述した七福神の宝船は、海の彼方の「他界」から幸せを運んで来る象徴として描かれているという説がある。また、

沖縄県や鹿児島県奄美地方に伝わるニライカナイという言葉は沖縄の言葉で「海のかなたの異郷」という意味である(新谷, 2022)。ニライカナイは理想郷のことであり、自然からの恩恵を授けてくれる神様が海の彼方からやってくるとされている。

折口(2016)は「稀に来る人」の意義から「まれびと(あるいは、まらひと、まろうど)」となったものと考えられるが、それでは十分ではなく、「ひとと言ふ語も、人間の意味に固定する前は、神及び継承者の義があつたらしい。其側から見れば、まれひとは来訪する神と言ふことになる」としている。上野(2022)は、「折口の考えるまれびとは、神でもあり、人でもある」とし「日本のような多神教の世界においては、人でも、どんな、ものでも神になり得る」とまとめている。

(2)「まれびと」としての恵比寿(夷)神

国生みの際に、伊弉諾尊(いざなぎのみこと)と伊弉冉尊(いざなみのみこと)が最初に設けた子は水蛭子(ひるこ)であると『古事記』にある。天照大神(あまてらすおおみかみ)や素戔嗚尊(すさのおのみこと)の兄にあたる水蛭子は、子どもの頃、三歳になるまで、足が萎えて立てなかったことから、舟に乗せて海に流された、とされている。

古事記(712)の「国生み神話」の中に「雖然久美度爾興而生子、水蛭子。此子者入葦船而流去。次生淡島。是亦不入子之例【然れどもくみどに興(おこ)して生める子は、水蛭子(ひるこ)。この子は葦船(あしづね)に入れて流し去(う)てき。次に淡島(あはしま)を生みき。こも亦、子の例(たぐひ)には入れざりき】」と記述されている。

また、日本書紀(720)にも、「次生蛭兒。雖已三歳、脚猶不立、故載之於天磐櫛樟船而順風放棄【次に蛭児(ヒルコ)を生んだ。三年経っても足が立たなかった。そのため天磐櫛樟船(あめのいわくすふね)に乗せて、風のままに放流した】」とされている。

海を漂っていた水蛭子は龍宮に拾われ育てられたとされ、天神の子孫であったことから、再び陸上に戻ることとなった。海から戻った水蛭子は、「エビス」信仰と習合して、西宮神社の主神として祀られるようになったと伝承されている(三井寺HP「いのりの原景」を参考)。西宮神社は、全国に約三千ある蛭児大神を祭る神社の総本社である。

「エビス」信仰とは海のむこうの「他界」からやってくる異物は豊穰や幸せをもたらすという信仰である。漁村であれば、漂流死体やクジラ、イルカなどもエビスと呼ばれ、豊漁を招く福の神とされてきた。時には異国の人が流れ付き、異なる文化を伝承し繁栄をもたらせることがあったであろう。

恵比寿様は、大人になっても立ち上がれない状態であったとされている。エビスビールのブランドキャラクターや恵比寿人形の多くが、釣竿を肩にかけ、鯛を小脇に抱えて片膝を立てて座っているのは、そうした由来からと考えられている。

(3) 福子・宝子信仰

大野・芝(1983)は「障害児がいると一家が一致団結し、裕福になる」という福子・宝子信仰が、全国各地に残っているとし、特に関西に濃密に分布しているとしている。渡辺(2000)は、福子信仰は、あくまで身内の障害児の扱いと見方から出発したものと思われるが、地域によってはこれをフクスケと呼ぶところがあり、福の神としての福助や『仙台四郎』につながっていくのではないかとしている。筆者の経験では、東北地方には「宝むすこ」ということばがあつて、知的な遅れのある子どもを指すことが多い。そうした子どもを大切に育てているとの意味がこめられていると考えられ「福子・宝子」意とつながると解釈できる。

小松(2022)は、村内の家が急に裕福になったり、また逆に没落してしまったりしたとき、合理的説明ができない場合、そこに神秘性を感じとったのではないかとしている。荒俣(1993)も福子のことに触れており、「さまざまな理由により不幸に生まれついた子がいる家庭は、その子のおかげで裕福になる」とし、東北地方に伝わる「ざしき童子」も福子と関わる伝承としている。「ざしき童子」は家々を巡る神とされ、その神が住んでい

る家は栄えるが、去ってしまうと没落するという。

山田（1993）は、「通常とは異なる特徴を持つ子が生まれることは民族社会の中では歓迎されざることであった」、「しかし、このような子どもが却って富をもたらすと説明する話もある」とし、『『歓迎される』異常児として『福子』が、『忌避される』異常児として『鬼子』がいる』としている。山田は、福子の伝承として「明治三十九年に淡路島（兵庫県津名郡）で生まれた祖母はある時、筆者に次の様な話をした。『福の神はあほを嫌わん言うてな、A旅館もSやんいうあほの子がおるうちはえらい繁盛しよったけんど、その後はさっぱりやな』』というエピソードを紹介している。

異なる特徴をもつ子どもが他界からもたらされるというイメージが、その家の盛栄につながるということは「まれびと」の発想と重なると考えられた。

4. 本稿の目的

山田（1993）は「望まれる『子ども』の条件が、一人前の労働力を担い、子孫を残し、家や親に『富』をもたらすことであるとするならば、そのような通常のコースを辿らない子どもは社会の中では『子宝』とはなり得なかった」であろうが「民俗社会の中で通常のコースをたどれない『子ども』と富が深く関わるという言説が存在する」としている。また、小松（2022）は、「日本の民族社会における異人観や異人との交渉について研究を行ってきたのは民俗学であった」とし、「日本では古くは異人を歓待するという面が多かったが、次第にそれが忌避・虐待（排除）の面の方が前面に出てくるようになった」としている。とするならば、障害のある子どもを大切に育てること、あるいは天真爛漫に生きる姿から他者のこころを柔らかく包んでくれる存在となり得ること。それは、労働力としてではない、「商売繁盛」や「福德招来」という福を呼び寄せる存在とされたことは、「まれびと」とつながる障害者観、人形や写真を福の神を呼び込む形代とする思想との融合があったのではないか、福助さんと仙臺四郎が福の神となったことは、通常のコースをたどれない異人（筆者はこれを「まれびと」ととらえている）としての知的障害者が、富と関わるという民俗学的な観点からとらえることで理解できるのではないかと考えたのである。

Ⅱ. 福助人形について

1. 伏見人形について

京都伏見は古くから焼き物の里として知られていた。現在でも伏見稲荷大社の祭事には耳土器（みみかわらけ）が使われている。

伏見稲荷山や深草一帯には良質の粘土があり、土師職が伏見深草の里に住んで土器、土偶（土人形）を創りだしたとされている。また、土師氏の祖として『日本書紀』などに登場する古墳時代の豪族である野見宿称（ノミノスクネ）の後裔にあたる土師氏が住み着いていたとされる。

稲荷山の土で造った古い郷土玩具として伏見人形がある。伏見人形は江戸時代後期に最盛期を迎えていた。全国で九十余种以上ある土人形の祖ともいわれているのである。江戸後期に最盛期を迎えた伏見街道沿いには、約60軒もの窯元が軒を連ねていたそうだが、現在では寛延年間（1750年頃）創業の窯元「丹嘉」1軒のみとなっている。



写真1 伏見人形の老舗（丹嘉）



写真2 江戸時代から使われ続けている土型
（摩耗しにくい、粘土の水分を吸い取る容積が少ないため、大量生産には不向きとのこと）

（写真1～2は筆者撮影）

2. 福助人形縁起（新説を含む）

荒俣（1993）によれば、福助さんについて古くは、『吹寄叢本（ふきよせそうほん）』（安永2：1773）に「福助」が「お福」をめとる話が掲載されている。また、上下を着けている様子などからし、江戸中期以降の成立と考えられるとしている。太田南畝『一話一言（いちわいちげん）』に「享和3（1803）年に（福助人形が）流行した」と記載されている。また、荒俣は「いちばん古い福助は、どうやら伏見人形として売り出されている」と記している。福助の由来を尋ねてみると、福助人形と福助伝説とが同時に出てくるのである。

福助の由来となる福助伝説は諸説有るので紹介する。（4）は丹嘉の七代目・大西時夫氏から筆者が聞き取ったものである。

（1）摂津の国（現在の大阪府北中部と兵庫県南東部）で農業を営んでいた佐五右衛門の子ども「佐太郎」がモデルとする説（芸名としての「福助」説）

享和年間に摂津の国に住んでいた佐五右衛門は非常に長命であった。佐五右衛門の子ども「佐太郎」は、身長が2尺（約60cm）ほどしかなく、頭が大きく障害があったとされている。

そのことで近所の笑いものにされてしまい、こころを痛めて家から離れて住まうことにした。その途中で香具師（やし：お祭りや縁日などで露店を出して商売をしたり、見世物の興行をしたりする人）に誘われ、生活の事も「見世物」に出ることとした。東海道を歩いて江戸に行き、江戸で大評判となった。そこで「佐太郎」から「福助」という芸名にしたところ、福々しく縁起が良いとされますます人気が上がった。それにあやかうとして人形が売り出されたという説。

（2）亀屋もぐさ屋の番頭「福助」説（元々の名前が福助説）

亀屋は伊吹もぐさを商っていた。亀屋には天明年間（1781年以降）に生を受けた福助という番頭がいた。福助は正直者で、亀屋の創業以来伝えられて来た家訓を守り、袴を着て、お客様にはまごころで接し、感謝の気持ちを忘れなかった。手に持つ扇子がトレードマークであった。

福助のお陰で亀屋は繁盛し、亀屋の主人も福助を大切にしていたという。こうした話が京都にまで伝わり、伏見の人形屋が福を招く縁起物として福助人形を作ったところ、商売繁盛を願う人々から大流行し、店先に飾られるようになったという説。実際、



図1 安藤広重「木曾街道六十九次」 柏原

※右端に福助人形が描かれている

亀屋には巨大な福助人形が現在も店頭に飾られており、安藤広重の「木曾街道六十九次」柏原にも描かれている。

(3) 京都の呉服屋「大文字屋」説（「福の神のような人」＝「福助さん」説）

下村彦右衛門は、1688（元禄元）年に京都伏見にあった古手屋（古着屋）「大文字屋」に三男として生まれた。その後、下村彦右衛門は、京都の「大文字屋」という大きな呉服屋の主人となり、一代で大長者となった。

彦右衛門の容姿は、身長が5尺（1m50cm）弱と低かった。また、頭が極端に大きく、耳たぶが垂れ下がっていた。彦右衛門は、毎年年末になると貧しい人々のために古着やお金をあげたり、炊き出しをして食事を施したりし、奉仕のところで多くの人を救ったとされる。彦右衛門はいつからか「福の神のような人」＝「福助さん」と呼ばれるようになった。それにあやかりたいという人が沢山いたため、京都伏見の人形屋が、「彦右衛門」の容姿の特徴を取り入れた人形を作って売り出したところ、大流行となったという説。ちなみに京都では今でも福助人形を「大文字屋」と呼ぶ人がいるとのこと。

(4) 京都の呉服屋「大文字屋」の息子説（筆者が京都伏見七代目「丹嘉」：大西時夫氏にうかがった説）

京都の呉服屋「大文字屋」の「下村彦右衛門」の息子は頭が大きく、知的な遅れがあった。

彦右衛門は、店にも連れて行き、この子を大層かわいがっていた。そうしたところ店は繁盛し、財を成して大長者となった。

これにあやかりたいという人が多く、京都伏見の人形屋が、彦右衛門の息子の容姿の特徴を取り入れた人形を作って「福助」と名付けて売り出したところ、大流行となったという説。

福助人形は子どものイメージがある。(1)～(3)は容姿的には一致するがモデルが大人である。福助さんは、水頭症であったといわれている。制作開始当時から伝わる丹嘉の福助人形(写真3の左側)は頭囲がかなりあり、確かに水頭症の特徴と相まっている。水頭症は、脳室に髄液が溜まることで脳圧が高くなることから、大きな頭になってしまい、知的な遅れを伴うことがある。現在は、髄液を抜く管（シャント）を体に埋めこむことによって、脳の機能を保全している。水頭症と子どもということを考えると(4)の説が、最も辻褄が合うように考えられるのだが、どうだろう。

3. 福助人形の広がり

それまでも北前船や参勤交代の際のお土産として伏見人形は、各地で知られていた。しかし、福助人形が全国に知られるようになったのは、福助足袋の功績が大きい。

福助株式会社の前身「丸福足袋辻本商店」（大阪堺、明治15年〔1882〕創業）は、丸の中に福と書かれた商標が他社とのトラブルとなっていた。伊勢神宮への初詣の帰りに伏見人形の福助を見つけ、それを商標とすることを思いついた。そこで「福助印堺足袋」と改名（現・福助株式会社）し、福助人形をもとにして福助像を描き新しい商標とすることとした（明治33〔1900〕年）。これは、両手をきちんとつけた「おじぎ福助」の元祖とされている。

荒俣（1993）は、福助株式会社が博多人形に福助人形の作成を依頼したとしており、福助人形の子ども化を推進する原動力になったのは、子どもの人形を多く作っていた博多人形によるものであるとしていた。しかし、今回の調査で、京都伏見の「丹嘉」にも福助株式会社より、福助人形作成の依頼があったことを聞き取ることができた。依頼を受け、それまでの伝統的な福助人形を「かわいらしくして作成した」（七代目「丹嘉」：大西時夫氏談）とのことであった（写真3の右側）。確かに「丹嘉」で作られた二つの福助人形の容姿を比較すると、その違いは明らかである。

全国で九十余種以上ある土人形の祖といわれ、民俗的な美しさを誇る伏見人形は、北前船や参勤交代などの土産として日本各地で知られていた（大西時夫氏談）。しかし、福助人形の認知が全国に広がったのは、福助足袋の全国展開に伴い全国の販売店に福助人形が配布されたことによる。

ちなみに福助人形は、The Beatlesの名盤とされる「SGT. PEPPER 'S LONELY HEARTS CLUB BAND」のアルバム・ジャケットの左下に鎮座していることでも知られる。

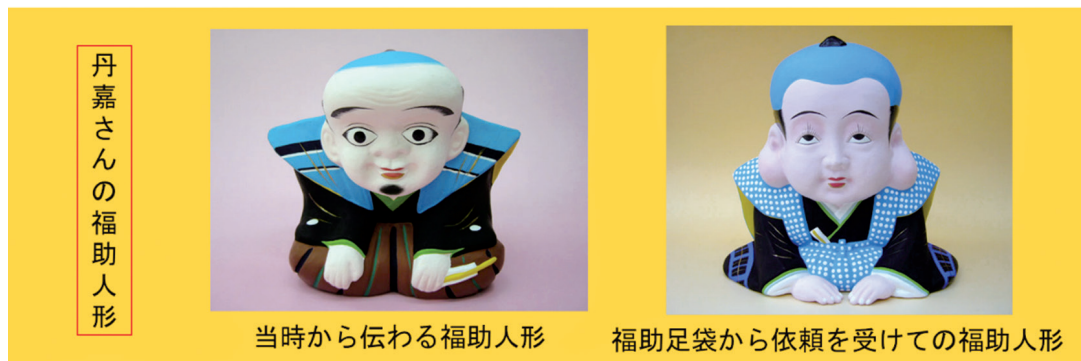


写真3 福助人形の変化

【<http://www.tanka.co.jp/base.htm> : 「丹嘉」HP より（掲載許可をいただいています）】

Ⅲ. 仙臺四郎について

1. 仙臺四郎縁起

仙台市内の多くの店には商売繁盛の神様として仙臺四郎の人形や写真が飾られている。仙臺四郎は、江戸末期～明治35年頃に仙台市に実在した人物である。父親が鉄砲鍛冶職人で、生家が火の見櫓の下にあったことから「櫓下の四郎」や、知的障害があり「バアヤン」という言葉しか話せなかったことから「四郎馬鹿（しろばか）」と呼ばれていたとのこと。性格は温厚で、いつもニコニコしており、四郎が立ち寄る店は必ず繁盛し、彼が抱いた子どもは丈夫に育つということから街の名物男・人気者であったとされている（菊田, 1933 ; 鈴木, 1837 など）。

田村（1984）は、「写真で飾る商売繁盛の神一四郎バカ」と題して、「お店の繁昌を祈るまじないの写真」、「仙台の人達は彼の生前の在り方に感謝する心と縁起を含めて遺影を飾る」としている。

三原（1982）は、「人には絶対にあだをすることなく愛嬌があって、人呼んで福の神といい、知事や市長の名は知らなくとも四郎を知らない者はなかったほど、明治一代を通じて仙台の名物男であった」ことや、「言葉は唾も同然『バアヤン』というだけ。年がら年中ドテラに縋の半天、いつも両手を組んで懷ろに入れ、坐ると前を合わせることを知らず、まるまると太った両の膝カブを丸出しにしていた。もらい物を入れる大きな袋を首にかけて胸にぶらさげ、毎日あてもなく市中を徘徊」していたことなど四郎の様子を詳細に記していた。また三原は、後年母親から、「お前が丈夫に育ったのも福の神の四郎に可愛がられたおかげ」と言われたとしている。



写真4 仙臺四郎

岡本かの子（1938）は、「私が異様に思ったのは、それらに囲まれて中央に貼ってある少年の大きな写真である。写真それ自体がかなり旧式のものを更に年ふるしたせいもあるだろうが、それにしても少年の大ようで豊かでそして何か異様なものが写真面に表われているのにながらうたれた」とし、さらに「私が思わず硝子近く寄って、つくづく眺め入るのを見て、有志の一人は側に来て言った。『それは、東北地方では有名だった四郎馬鹿の写真です』と四郎の写真を初めて見たときの様子を描いている。そして「四郎馬鹿さんに見舞われた店はどうも繁昌するようだ。東北の町々にこういう風評が立った」と表現している。

丘（1997）は、「天の神さんは四郎があまりにかわいいもんだから、四郎から邪心（けがれた心）というものを取ってくださったのかもしれない」としており、知的障害のある方の純真無垢な様相を表現していた。また、渡邊（2000）は、「本の帯には、明治の時代に、仙台の町でみんなにばかにされたり、愛されたりしながら、無邪気に自由に生き抜いた四郎さん。笑いと涙に包まれた四郎さんの人生が・やさしく語りかけてくれるものは…」と書かれており、ホノボノとした子ども向けの物語であったとしている。

2. 仙臺四郎の広がり

河北新報ONLINE（2022年4月7日）は、仙台市教育委員会が2010年3月にまとめた民俗文化財調査報告書によると、「市内の中心商店街の約200軒中、約14%の27軒が仙臺四郎を祭っていた」とし、「自由な発想で祭ることができる身近な福の神」としていた。また、1885（明治18）年に行われた仙台藩藩祖伊達政宗の没後250年の祭典で、派手な衣装を纏った仙臺四郎が山車の先導役を務めていたことを新聞が報じたことを紹介していた。

郷土史の研究家であった逸見英夫氏（故人）は河北新報社が仙臺四郎について取材したところ「生きながらにして福の神であった」と話したとのことであった。仙臺四郎がどのようにして信仰を集めるようになったのかは定かでないとしつつも、少なくとも大正時代には市内の写真館が仙臺四郎を「福の神」とする写真や絵はがきを製作・販売し、一般に出回っており、不況などを背景として戦前や戦後に仙臺四郎ブームが起きていたとした。仙台市歴史民俗資料館の学芸室長は「仙臺四郎は新しいタイプの民間信仰で、実在の人物を神として扱うのはあまりない。ある程度の人から愛され、もともと福の神的な要素があったから、これだけ残っている」のであろうと述べていた。

仙臺四郎を祀っている青葉区中央通りにある三瀧山不動院（みたきさんふどういん）は、「仙臺四郎安置の寺」として知られる。仲見世には土製の置物や額入り色紙、のれん、Tシャツなど縁起物の仙臺四郎グッズが並ぶ（写真5～8）。

仙台市の玄関口、仙台駅の1Fには、「仙臺驛四郎」が飾られ、訪れる人を迎えている（写真9）。クリスマス・シーズンになると、トナカイに引かれたそりに乗ったサンタクロース四郎が商店街に登場する（写真10）。他にもプロ野球チームや建設会社のキャラクターにも登場している。仙台では市民の間に仙臺四郎が定着している。

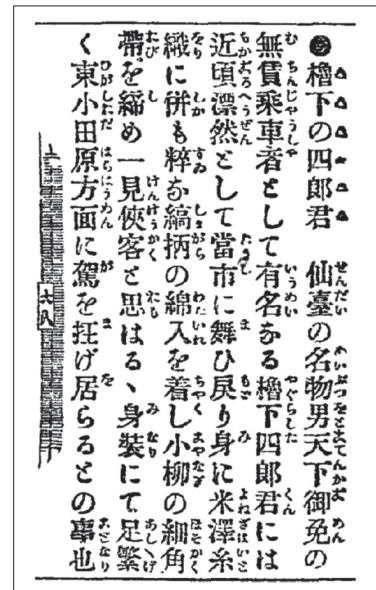


図2 1909年12月17日付
四郎の事を伝える河北新報の記事



写真5 仙台市の繁華街 中央通り



写真6 三瀧山不動院



写真 7 仲見世のグッズ売り場



写真 8 三瀧山不動院の仙臺四郎座像



写真 9 仙臺驛四郎（仙台駅 1F）

写真 10 サンタクロース四郎
（中央通り）

写真 11 正月絵馬の四郎（中央通り）

(写真 5 ～ 11 は筆者撮影)

IV. まとめ

山田（1993）は、「異常児が、富とともに他界からもたらされるというイメージは、異常児の去来によって家の盛衰が決定されるという話へとつながるであろう」とし、「異常児の誕生という不幸によって『富』の獲得という幸福とのバランスをとろうとする家の外部の者の心意もうかがうことができる」としている。また、渡邊（2000）は、「知的障害者のすべてが福の神になれたわけでもない。福の神にされてしまうということは、結局のところ、障害者を人間として認めず、人間から切り離して神格化することによって、障害者のわずかなりの存在意義を認めるという逆差別に陥っている」と述べている。

異常か障害かということよりも、「まれ」ということに私は着目したい。発達検査や知能検査では 2% 程度が知的障害と判断される可能性があるとされている。2% 程度とされることが多いか少ないかという判断はしづらいが、日常生活において知的障害のある人と出会うことは、あまりないか、あってもすれ違う程度のことだろう。これは「まれ」ということになると考えられる。江戸や明治の時代であればなおさらのことではなかったか。知的障害のある人が「まれびと」として受け止められ、そうした「まれびと」が幸福をもたらすということは、合理的説明ができない神秘性を伴ったことと感じたに違いない。折口（1951）は「日本人は神を招き寄せるに、神がいらっしゃる目印を立てなければならぬものと思っていた」とし、「神をして、自分と似ているという類似感を起こさせる爲に、人形とか銀月を立て」たとしている。福子・宝子信仰や神秘性への興味・関心も相まって、

人々は形代（依代）となる福助人形や、仙臺四郎の写真を求め、「福の神」としての象徴となったのではないかと考えるのである。

引用・参考文献

- American Psychiatric Association（日本語版：日本精神神経学会 監修）（2023）『DSM-5-TR 精神疾患の分類と診断の手引』．医学書院．
- 荒俣 宏（1989）『広告図像の研究』．平凡社．
- 荒俣 宏（1993）『福助さん』．筑摩書房．
- 福沢諭吉（1866）『西洋事情初編』．慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクション「デジタルで読む福澤諭吉」 <https://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja/fukuzawa/a02/3>（令和6年11月1日閲覧）
- ひげばあさん（2021）『幕末仙台庶民伝 オレとシロバカ 特別号Vol.1』．丸善仙台出版サービスセンター．
- 平藤喜久子（2017）『日本の神様解剖図鑑』．株式会社エクスカレッジ．
- 河北新報ONLINE（2022年4月7日） <https://kahoku.news/articles/20220406khn000023.html>（令和6年11月17日閲覧）
- 河野正訓・山本 亮（2024）『はにわのヒミツ』．新泉社．
- 菊田定郷（1933）『仙台人名大辞書』．仙台人名大辞書刊行会
- 小松和彦（2022）『異人論』．ちくま学芸文庫．
- 厚生労働省（2005）知的障害児（者）基礎調査：調査の結果．<https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/101-1c.html>（令和6年11月15日閲覧）
- 三原良吉（1982）『郷土史仙臺耳ぶくろ』．宝文堂出版．
- 三井寺HP 「いのりの原景」 <http://www.shiga-miidera.or.jp/serialization/prayer/119.htm>（令和6年11月17日閲覧）
- 水木しげる（2022）『決定版 日本妖怪大全 妖怪・あの世・神様』．講談社．
- 文部科学省（2021）障害のある子供の教育支援の手引～子供たち一人一人の教育的ニーズを踏まえた学びの充実に向けて～．
- 大野智也・芝 正夫（1983）『福子の伝承：民俗学と地域福祉の接点から』．こずえ
- 岡本かの子（1938）みちのく（四郎馬鹿）．仙台出版工業社
- 丘 修三（1997）『福の神になった少年 仙台四郎の物語』．佼成出版社
- 折口信夫（1915）髭籠の話．郷土研究．【折口信夫（1974）古代研究Ⅰ，角川ソフィア文庫，pp200-231．】
- 折口信夫（1951）日本美．折口信夫全集17，p112．
- 折口信夫（2016）『国文学の発生（第三稿）まれびとの意義』．ゴマブックス．
- 世界保健機関（WHO）（2018）『ICD-11』
- 新谷尚紀（2000）『神々の原像 祭祀の小宇宙』．歴史文化ライブラリー 94．吉川弘文館．
- 新谷尚紀（2022）『民俗学がわかる辞典』．角川ソフィア文庫．
- 鈴木省三（1937）『仙台風俗志』．国立国会図書館デジタルコレクション／（1990）復刻版『仙台風俗志』．今野印刷株式会社．
- 田村 昭 編著（1984）『仙台の珍談奇談』．宝文堂出版．
- 上野 誠（2020）『折口信夫 魂の古代学』．角川文庫．
- 上野 誠（2022）『100分de名著 折口信夫『古代研究』』．NHK出版．
- 渡辺 徹（2000）「仙台四郎」にみる障害者観．宮城教育大学紀要，35，pp237-243．
- 渡辺 徹（2013）宮城県・仙台市の特別支援教育—むかし・いま・これから—．LD研究，22(1)，pp2-9．
- 山田巖子（1993）子どもと富：〈異常児〉をめぐる〈世間話〉．国立歴史民俗博物館研究報告，54，pp267-294